

審査結果の内容の要旨

氏名 松岡 恵子

本研究は、痴呆性高齢者の行動障害がどのような要因と関連するかを、各行動ごとに詳細に検討したものであり、以下の結果を得ている。

1. 「精神病的・神経症的行動」は患者の移動能力が高いほど起こりやすく、また認知機能低下と関連していた。また、「認知機能」と「移動能力」との交互作用を検討すると、「移動に全面的な介助を必要とする患者」では、認知機能低下にともなって得点が低下していたが、「移動が自立している患者」では認知障害が中等度である群でもっとも「精神病的・神経症的行動」が高かった。この結果は、「精神病的・神経症的行動」を可能にする移動能力・言語能力といった、いわばコミュニケーション能力との関連から考察された。

2. 「攻撃的な行動」については、男性患者ほど高かった。また、「認知機能」と「移動能力」との交互作用を検討したところ、「移動が自立している患者」においてのみ、認知機能低下にともなう尺度得点上昇がみられた。この結果は、もともと持っていた攻撃性が痴呆に伴う障害によって誇張された可能性が考えられた。また、介助機会の増加にともなう介助への抵抗が「攻撃性」としてみられた可能性も考えられた。

3. 「不潔・収集行動」、は認知機能低下と強く関連していた。また、「認知機能」と「移動能力」との交互作用を検討したところ、「認知機能が中等度から重度に障害されている患者」では移動能力が保たれているほど「不潔・収集行動」は起こりやすくなっていた。これらの結果から、「不潔・収集行動」は痴呆のステージに強く依存する行動であり、認知機能が低下するにつれて起こりやすくなるが、移動能力の低下につれて減少に向かうことが示された。

4. 「迷子・火の不始末」も「不潔・収集行動」と同様に認知機能が低いほど起こりやすくなっていた。「認知機能」と「移動能力」の交互作用を検討すると、「認知機能が中等度から重度に障害されている患者」では移動能力が保たれているほど起こりやすかった。これらの結果は、「迷子・火の不始末」が痴呆のステージに関連する行動障害であることを示すと同時に、認知障害により惹起されやすくなったそれぞれの行動の実現を可能にする移動能力という観点から考察された。

5. 「性的行動」は、「患者の年齢が若年であること」と、「患者が男性であること」と関連しており、「認知機能」や「移動能力」といった痴呆のステージに関する変数との関連は低

いと考えられた。

以上の検討より、本論文は臨床的にしばしば問題となる「行動障害」を詳細に取り上げ、とくに「認知機能」と「移動能力」の交互作用に注目してどのような患者要因が関連するかを、多数例のデータを用いて実証的に明らかにした点で、独創的であると思われる。また、臨床現場から生まれた概念である「行動障害」について、その因子構造を明らかにするとともに各行動障害と関連する患者要因を明らかにしたことで、臨床的な有用性を兼ね備えていると考えられる。この点から、本論文は学位の授与に値するものと考えられる。